

私学の魂

工学院大学附属中学校・高等学校

“日本の教育を変える”志からスタートした ハイブリッド3クラスの設置4年目を迎え、 「THINK、MAKE、SHARE」の学びを進化させた 本格的な「21世紀型教育」導入最先進校!

2015（平成27）年4月から、中学校にハイブリッド特進クラス、ハイブリッド特進理数クラス、ハイブリッドインターナショナルクラスの3クラスを開設して4年目を迎え、今春2018年4月からは、高等学校にハイブリッド文理先進コース、ハイブリッド文理コース、ハイブリッドサイエンスコースを新設。前年から先行して設置されたハイブリッドインターナショナルコースに加え、新4コース体制をスタートさせた工学院大学附属中学校・高等学校。そこで実践される本格的な「21世紀型教育（21ST CENTURY EDUCATION）」プログラムは、現時点では日本国内でも最先端の教育展開といってもよいでしょう。そうした大胆な教育改革とその手控えについて、今回は、校長の平方邦行先生をはじめ、現場での教育に携わる先生方にお話を伺いました。



校長 平方 邦行先生

DATA 1

工学院大学附属中学校・高等学校

沿革	1887（明治20）年	帝国大学総長渡辺洪基を中心として工手学校設立協議会を開催
	1888（明治21）年	築地に工手学校として開校
	1928（昭和3）年	東京市淀橋町（現新宿区西新宿）に新校舎落成。校名を工学院と改称
	1948（昭和23）年	学制改革により工学院高等学校（第1部・第2部）と工学院中学校に分離開設
	1949（昭和24）年	工学院大学開学に伴い工学院大学高等学校と改称
	1958（昭和33）年	工学院大学中学校生徒募集を停止
	1992（平成4）年	工学院大学附属高等学校と改称。工業に関する学科を廃止
	1996（平成8）年	工学院大学附属中学校を開設
	2002（平成14）年	男女共学を開始
	2015（平成27）年	中学校にハイブリッド特進クラス、ハイブリッド特進理数クラス、ハイブリッドインターナショナルクラスを開設
	2017（平成29）年	高等学校にハイブリッドインターナショナルコースを先行設置
	2018（平成30）年	高等学校にハイブリッド文理先進コース、ハイブリッド文理コース、ハイブリッドサイエンスコースを新たに設置し、新4コース体制スタート

校長 平方 邦行

所在地 〒192-8622 東京都八王子市中野町 2647-2
TEL：042-628-4914（代表）
<https://www.js.kogakuin.ac.jp/>

交通 JR「八王子駅」、JR・小田急・京王線「新宿駅」、京王線「北野駅」「南大沢駅」、JR・西武線「拝島駅」からスクールバス（八王子駅から約20分）。新宿（工学院大学新宿キャンパス）からスクールバスで40分。

日本初の「ハイブリッド3クラス」 導入から4年目を迎え、高校も変わった 「21世紀型教育」導入の最先進校

いまの子どもたちが社会に出る将来、大きく変化する社会を見通し、「日本の教育を変える」私立中高になるべく、工学院大学附属中学校が、日本初のハイブリッド3クラス《ハイブリッド特進クラス、ハイブリッド特進理数クラス、ハイブリッドインターナショナルクラス》を創設したのが2015（平成27）年。

それから4年目を迎え、今春2018（平成30）年からは、高校でもハイブリッド4コース体制がスタート（ハイブリッドインターナショナルコースは1年先行して2017年にスタート）しました。

すでに、日本国内でも盛んに言われるようになった「21世紀型スキル」を育てる教育を実践するために、首都圏の私立中高一貫校の有志による「21世紀型教育を創る会（＝通称「21会」）」が結成されたのが2011年。その、通称「21会」設立の中心を担ったのが、この工学院大学附属中学校・高等学校の校長である平方邦行先生です。

この2～3年の中学入試における話題の中心になってきた三田国際学園中高等学校園長の大橋清貴先生、前・かえつ有明中高校長で現・香里ヌヴェール学院学院長の石川一郎先生とともに、この「21会（＝その後2017年から『21世紀型教育機構』に改称）」の発起人兼理事として、それぞれ自らの学校で斬新な教育を導入～実践し、日本の教育に新たなムーブメントを起こすことに成功してきました。

つまり、この工学院大学附属中学校・高等学校の教育改革をリードしてきた平方先生は、日本の私立中高一貫校の教育現場における「21世紀型教育」の理論的・実践的先駆者であり、「21会」の精神的支柱ともいえる存在です。



「映像教育」も取り入れた「CLIL（クリル：内容言語統合型学習）」型の英語授業

その平方邦行先生は、「21世紀型教育」について、次のように語っています。

教育の歴史的転換期に、未来を見据えて、 自己変容型知性を磨くことができる、 私学ならではの先進的教育を！

「日本の教育を常に牽引してきたのは、私立学校の先進性や独自性であったことは言うまでもありません。変容するグローバル社会で、ITの進化は学校教育にも大きな変化をもたらしてきました。今や21世紀型教育は、ICT機器を抜きにしては成立しません。つまり世界標準の教育にはICT環境整備が不可欠であり、遅れることは許されないことです。

同時に世界及び我が国の教育は、歴史的転換期の真只中いることの自覚をしなければなりません。このような時代の転換期には、未来を見据えた組織変革とともに、個々の教師も、さまざまな変容に対応できる自己変容型知性を磨くことが求められます。10年前20年前の過去と現在の社会の違いは歴然としていますから、過去の教育手法や教師の有りようを、そのまま焼き直したのでは、私立学校の先進性は錆びたものになってしまいます。今や先進性や独自性は中途半端なマイナーチェンジでお茶を濁して、さあ終わりでは済ませられません。

一方、国の教育制度改革は政府・文部科学省の主導のもと、中等教育と高等教育を中心に2014年12月に中央教育審議会は文部科学大臣へ答申を提出し、それを受けて2015年3月に高大接続システム改革会議で検討が始まりました。

その重点施策の内容は、ア)各大学の個別選抜の改革、イ)高等学校の教育改革、ウ)大学教育の改革、エ)大学センター試験の改革など4つの項目です。なかでもエ)のセンター試験を改変する中で、英語を2技能（読む・聞く）から4技能（読む・聞く・書く・話す）へと、質の転換を図ることが重要なテーマになりました。同時に外部検定試験のスコアを、段階的評価として新テストに導入することになっています。

更に、数I・国語総合に記述式問題を加えました。この改革の根底にあるのは、変容するグローバル社会への対応と「知識」や「技能」の習得だけでなく、むしろ「思考力」「表現力」「判断力」及び「主体性」を持って多様な人々と「協働」して学ぶ態度を重視する学力観の変更にあります。

ところで高校現場では、入試が変わるのは2020年だから自分たちは関係ないと、高を括っている高2・3生がいるとしたら危険です。既に多くの国公立大学や

GMARCH 以上のレベルの大学では、多様な入試へと移行しています。

特に英語では、外部の検定テスト利用している大学は 100 を超えています。また CEFR の C1 レベル以上の受験生に加点などの優遇措置を高めるなど、着実にグローバル高大接続教育が浸透してきました。今や知識とその理解がメインの中高大接

続教育から、分析・応用の知性が必要とされ、更に批判・創造の知性こそが、未知の境界を切り拓くに不可欠であることが叫ばれるようになってきたのです

ここで平方先生が伝えたかったことは、単に「2020 年から大学入試が変わる」から「教育も変わるべき」ということではないはずです。だからこそ、私立学校の一翼を担う存在として、工学院大学附属中高は、教育の先進性や独自性を「中途半端なマイナーチェンジでお茶を濁す」ことなく、思い切って新たな時代に求められる教育の実践に向けて、大きく舵を切ったのです。

全教科でアクティブラーニングを導入。 ハイブリッド（多言語・多文化）化する社会で “協働で問題を解決できる”心と力を育てる！

そして今春 2018 年 4 月。中学ハイブリッド 3 クラスの創設から 4 年目を迎え、高校でも新たにハイブリッド 4 コース体制がスタートしました。それが「ハイブリッド文理コース」、「ハイブリッド文理先進コース」、「ハイブリッドサイエンスコース」、「ハイブリッドインターナショナルコース」の 4 コースです。

環境・人口・経済問題など、あらゆる事象が取り巻く昨今、論理的な考え方や問題解決能力を持つことは



「Cambridge English School」の認定を受けた英語では、ケンブリッジ大学出版発行の教材『Uncover』（中学）、『Unlock』（高校）を採用。Uncover は身近な話題から社会問題まで多彩な Topic を取り上げており、4 技能をバランスよく習得できる構成になっている。



非常に重要です。そのため、工学院大学附属中高では、校訓でもある「挑戦・創造・貢献」のもと、工学的な立場から社会発展に寄与する力を身につける教育を重視してきました。

中学・高校の各クラス・コースでは、グローバル・イノベーション・リベラルアーツ・英語の運用力・ICT 活用力を重視、教師は IB（国際バカロレア）的な思考を習得しながら、「21 世紀型教育」を実践しています。

解決できない問題が山積みした現代社会では、“自ら考え解決する力”や“協働で問題を解決する心”が必要とされます。その力を養うには「アクティブラーニング」が有効です。

「そのために本校では、諸外国ですでに主流となっている対話型『PIL（ピア・インストラクション・レクチャー：PEER INSTRUCTION LECTURE）』、問題解決型『PBL（プロジェクト・ベースド・ラーニング：PROJECT BASED LEARNING）』の授業を実施し、生徒同士または教師との対話を重ね、主体的に考える学習を積み重ねていきます」と平方先生は言います。

それでは、中学のクラス、高校のコースに冠せられた「ハイブリッド」とは、何を意味するのでしょうか。

「ハイブリッド」にはもともと「雑種」や「混成・混合」という意味がありますが、世界のグローバル化の進行

PIL	PBL	ICT
PEER INSTRUCTION LECTURE	PROJECT BASED LEARNING	INFORMATION COMMUNICATION TECHNOLOGY
対話型授業	問題解決型授業	ICT教育
一つの正解を求めるだけでなく講義に対話を導入する授業法で、グローバル化に対応した世界標準の教育です。レクチャー型の授業をバランスよく取り入れ、21世紀型の教育を推進していきます。	具体的な課題を自ら設定し、その解決に向かって取り組む問題解決型学習法です。解なき社会で存分に力を発揮するために、自ら考え、的確な判断を生み出せる力、予測できない急激な変化に立ち向かえる力を養います。	全教室には電子黒板とWi-Fiを設置。生徒は中学入学時よりiPadを手にし、電子黒板と連動した双方向授業や、探究型学習に活用していきます。そして情報社会に育つ世代に必須といえるITリテラシーを身に付けます。

は「ハイブリッド化」しているとも言い換えられます。それは多言語、多文化の共生を意味しており、その重要性は増すばかりです。

「中高の各クラス・コースを『ハイブリッド』と冠しているのは、そのような未来を意識し社会から必要とされる人に育っていくことを願っているからです」と平方先生。

中学では、工学院大学附属中の学びのコンセプトでもある「Think(思考する)・Make(形にする)・Share(分かち合う)」をベースに、「ハイブリッドインターナショナルクラス」「ハイブリッド特進クラス」「ハイブリッド特進理数クラス」の3つのクラスが編成されています(以下、文中では「ハイブリッド」を「HB」と表示)。

「HB インターナショナルでは、理科・数学を英語イメージで実施する言語を重視したカリキュラム、HB 特進では、幅広い分野の学力と柔軟な進路選択を可能にするカリキュラム、HB 特進理数クラスでは、理科と数学に重点を置いたプログラムで高度な学問への興味を喚起するカリキュラムを実施しています」とカリキュラム・マネジメント・リーダーの岡部憲治先生。

すでに中学校では、全教科で「PIL」、「PBL」を軸にアクティブラーニングを導入している工学院大学附属 中学校ですが、特に英語教育では、クラスを問わず「CLIL(内容言語統合 型学習)」型のオールイングリッシュ授業を実施しており、今後のグローバル社会で活躍するための「C1 英語」の習得をめざしています。実際、同校は2017年から日本の中高では初めての「Cambridge English School」の認定を受け、世界中で使用されているケンブリッジ大学出版のオーセンティックな教材を使用し、生徒が生き生きと楽しく活動しながら、英語で意思疎通し、常にプロジェクトを実施する課題解決型授業を行っています。また、ケンブリッジ英検を活用することで「世界標準」の英語測定により4技能習得の向上を可視化しています。

そして「ICT 活用」については、すでに中学生は全員、



日本の中高では初めての試みという「電子図書館『Over Drive JAPAN』」も今春から導入して活用している。

セルラー型のiPadを持って、授業はもちろん、自宅や通学途中の学習にも活用して



工学院大学新宿キャンパスから乗れるスクールバスは八王子キャンパスまで約40分で到着。

の入学者は、「BYOD」で各自が持参したノートPCを使っている授業が行われているといえます。

「生徒が各自の端末を使って、映像(動画)やプレゼンテーション用のパワーポイントなどを作成することは、すでに日常的な光景になっています。生徒は驚くほど速く操作に慣れ、学校生活のいろいろな場面でICT機器を軽やかに使いこなしています」と入試広報部部長の水川賢二先生が、生徒作品の一部を見せてくれました。また、英語の授業では「本校の特徴でもあるICT活用による『映像教育』を取り入れ、国際平和映像祭やアメリカの映像祭でファイナリストに選出された生徒もいます。英語字幕の作成なども行い、英語の力も伸びていく効果ははっきりと見えるようになっています」と英語科の中川千穂先生。

そうした先進的な教育展開とその成果や評判が、中学受験生や高校受験生の家庭に広く浸透し始めたのでしょうか。今年の春からは学校説明会や相談会への参加者数も、昨年と比べて目立って増加しているといえます。

なかには、新宿の工学院大学新宿キャンパス前から八王子キャンパスまでのスクールバスがあり、約40分で学校まで到着できることを最近知って、「それならば通学にも便利だ!」と考えて、学校説明会に訪れてくれる親子も増えているといえます。

「Cambridge English School」認定に加え、「電子図書館」も日本で初めて導入し、英語やデザイン思考の授業で活用を開始!

さらに、この工学院大学附属中学校・高等学校では、先の「Cambridge English School」認定に加え、もうひとつ“日本の中高では初めて”の試みである「電子図書館」も今春から導入されているといえます。

『Over Drive JAPAN』という電子図書館のシステムですが、日本の中高での導入は本校が初めてと聞いています。最初は、国内では洋書の紙の本が入手し

にくい、海外で発行された英語の電子書籍を読んでもらえると良いなと考えて導入しましたが、使い勝手も良いので、すぐに生徒は活用してくれるようになりました」と、国語科で図書館司書教諭の資格も持ち、デザイン思考の授業設計の中心になってきた有山裕美子先生。

「英語の授業の課題として、『電子書籍を読んでくる』ということもしています。音声読み上げ機能のついている電子書籍もあり、生徒は楽しんで読んでくれているようです」と中川先生もいいます。

もうひとつ、この2018年春からは、書庫だった部分を改造し、図書館内に「Fabスペース」という空間が設けられました。そこには、映像編集の可能なPCや大型モニターはもちろん、プログラミングして動かせるロボットやレゴブ

ロック、3Dプリンタなども設置されて、生徒がアクティブに使える創造的な学びのスペースとなるように設計されたスペースです。

「休み時間や放課後にも、生徒が集まってきて自由に何か作ったりしています。なかには、友達がプログラミングしたロボットの動きを見て注文をつけたり、それに応えて、その場でプログラムを修正して違った動きを見てもらったりする風景も見られるようになりました」と、この図書館のなかに生まれた新たな創造空間について、有山先生が笑顔で説明してくれました。

2020年以降の新たな大学入試に向けても 多様・多彩な能力を育む「21世紀型教育」で、 生徒が希望する進路の実現を力強く後押し

ここまでお伝えしてきたように、この工学院大学附属中学校・高等学校は、全国に数ある私立中高一貫校のなかでも、「21世紀型教育」の導入先進校であることは間違いありません。かといって決して「特殊な」学校というわけではありません。

受験生（小学生）本人が「この学校の授業って楽しそう！」とか「こんな学校で学んでみたい」と感じてくれて、保護者も同校の教育姿勢や教育内容に賛同してくれる家庭のお子さんであれば、特別に「英語が得意」とか「ICTが大好き」な子どもや、海外帰国生でなくても、すぐに学校に馴染んで、日頃の授業や学習も無理なく消化できるはずですよ。

「最近では本校が『英語教育に特化した学校』のようにイメージされている面もあるようですが、小学校ま



図書館内に設けられた「Fabスペース」は、生徒がアクティブに楽しみながら使える創造的な学びのスペース。映像編集もできるPCや大型モニターをはじめ、プログラミングして動かせるロボットやレゴブロック、3Dプリンタなども設置。

では英語学習をしてこなかった生徒でも、意欲的に授業に取り組み、ふつうに努力してくれれば、6年間で必ず高い英語力を身に着けることができます」と英語科の中川先生も言います。

それだけではなく、この工学院大学附属中学校・高等学校は、中学受験での学校選択のためのポイントとして、非常に数多くの教育の構成要素を持った学校といえるでしょう。

たとえば、いま「STEAM教育」の重要性が目される世界的な流れのなかで、理工系大学の附属校としての要素と、実際に自分で手を動かしてアイデアを形にする「ものづくり教育」の要素を併せ持ち、一方では「グローバル教育」が教育の喫緊の課題とされる時代に「C1レベル英語力の育成」と「IB（国際バカロレア）」的な教育姿勢と「海外大学進学」という目標も併せ持っているという、私学のなかでも“多くのポケット”を持つ学校なのです。

「学校説明会でも、小学生に向けて、たとえばマイクラフトやFabスペースのことを紹介すると、男の子がとても興味を持ってくれます。英語教育の話をする、最初は女の子の方が積極的に関心を示してくれます。高校受験の中学生には、本校の『高大連携』の話が注目されます。意外と女子にも高大連携の理系教育の話が好感を持たれます」と、数学科で「ハイブリッド4コース」第1期生（高1）の学年主任である鐘ヶ江暢子先生が話してくれました。

たとえば、理工系の高大連携教育に関心を持ってくれる受験生が八王子と近隣エリアから集まってくれる一方で、日本国内では最先端の「21世紀型教育」を



イングリッシュキャンプの様子。とくに中学校では貴重な体験ができる海外研修の機会がある。

求めて、教育についてのアンテナの高い家庭の子どもたちが首都圏の全域から集まってくれることも同時に歓迎して受け入れることのできる学校が、この工学院大学附属中学校・高等学校なのです。だからこそ「新宿からバスで40分」というスクールバス通学が可能という点にも注目が集まるのでしょう。

多くの中高生にとって楽しみである部活動でも、広い敷地に加え、隣接する大学キャンパスの施設も利用できることで、運動部も文化部も恵まれた練習・活動場所が確保できます。最近完成した大学の図書館を利用して、下校時のバスを待つ時間を有効活用する中高生もいるといいます。

さらに同校では、2年後に迫った「2020年大学入試改革」に向けて、従来の大学入試のあり方や大学入試問題、合否の評価の観点（評価軸）が変わっていく段階で、「PBL・PIL」のアクティブラーニングを通して「思考力・判断力・表現力」「主体性・多様性・協働性」を身に付け、「CLIL型のオールイングリッシュ授

業」によって「CEFR：C1レベルの英語力」を身に付けることができます。さらには「ICT活用」による「デザイン思考」の授業や「電子図書館」の活用、「Life is Tech!」や「Fabスペース」での自由な学びを通して、「創造性・独創性・芸術性」までを養うことができるのです。

そうした多彩な教育プログラムを有機的に組み合わせ、生徒一人ひとりの個性を生かして才能を伸ばし、自己肯定感を高めてくれる工学院大学附属中学校・高等学校。近い将来、その最先端の「21世紀型教育」によって成長した生徒が、大きな成果を見せてくれるに違いありません。

最後になりましたが、工学院大学附属中学校・高等学校では、来春2019年度入学生から制服が一新されます。この新しい装いも、きっと学校生活に新風を吹き込んでくれることと思います。

工学院大学附属中高が実践する「21世紀型教育」の多様な側面を知るためのキーワード

それでは最後に、工学院大学附属中高の教育展開を伺い知るために、すでに実践されているプログラムや教育環境、学内で使われているキーワードを下記に抜粋してご紹介します（各キーワードの解説は別途Web記事にて補足でご紹介させていただきます）。

詳細は、同校の『学校案内』などの資料に紹介されていますので、関心のある方は、ぜひ同校の学校説明会や見学会などに足を運んでいただければと思います。



工学院大学附属中高の多彩な「21世紀型教育(21CENTURY EDUCATION)」概念図

